

報告番号	※甲	第	号
------	----	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 日本における子育て目標と行動の調整に関する研究

氏 名 中根 愛

論 文 内 容 の 要 旨

子育ては選択の連続であり，子育て行動の選択に難しさを感じる親は少なくない（大竹他，2017）．今日の子育ては，インターネットの普及により親がアクセス可能な子育て情報が増えており，多すぎる選択肢による選択の困難さや選択後の満足度の低下（Haynes, 2009; Scheibehenne et al., 2010），更には子育てにおける迷いや不安につながっていると考えられている（小泉他，2017; 差波，2018）．本研究は親の子育て行動選択の支援につなげることを目指し，子育て行動に影響を与える重要な要因としての子育て目標と，親子の双方向コミュニケーション場面における子育て行動選択という二つの観点から検討を行った．

子育て目標のうち，とりわけ子どもの将来に望む姿である子育ての長期目標に関しては，子育て行動の関連やそれを通じた子どもの育ちへの影響から，多くの研究がなされてきた（e.g. Harwood et al., 1999; Raval et al., 2013）．この子育て目標は文化により影響を受けることが知られているが（Durgel et al., 2009; Keller & Otto, 2009; Suizzo et al., 2019），日本の親の持つ子育て目標についてはほとんど研究がなされてきていない．

そこで研究1では，日本の親の持つ子育て目標の構造と特徴を明らかにすることを目的に実施した．先行研究（Harwood, 1992; Harwood et al., 1995; Harwood et al., 1999; Hastings & Grusec, 1998）にならいインタビュー調査を実施した．インタビュー項目は，（1）日々の過ごし方と働きかけの目的，（2）将来子どもに望むことであった．調査対象者は1歳0ヶ月から3歳11ヶ月までの子どもを1名以上持つ母親9名であり，分析は質的データの分析手法であるM-GTA（木下，2003）を用いて行った．その結果，母親のとる子育て行動は，その背景に長期目標と短期目標があり，長期目標の先には母親の思う「良い人生像」があるという構造が見出された．長期目標は分析より6種類に分類されることが示された．具体的には，「やりたいことをやりながら生きる人」，「自分の人生を主体的に生きる人」，「他人への温かな気持ちを持ち，他人のために行動できる人」，「社会の一員としてまっとうに生きる人」，「周囲の人から理解・協力を得られる関係」，「家庭を頼りに

できる関係」の6種類であった。これらの長期目標のうち、「家庭を頼りにできる関係」は先行研究で言及されていない目標であった。「家庭を頼りにできる関係」の下位目標として見出されている「親（家庭）と愛情、信頼関係があること」については、先行研究 (Citlak et al., 2008) でも挙げられていたが、本研究では、愛情と信頼関係を築いた先に、「家庭を頼りにできる関係」を構築したいという目標が存在する可能性が示された。

研究2では、研究1で明らかになった日本の親の持つ子育ての長期目標を、簡易的に把握することを可能とする質問紙の作成を行った。子育ての長期目標を把握する質問紙は、他文化をターゲットとしたもののみ存在し、日本文化で利用可能なものは存在しない。他文化で用いられる質問紙に含まれる項目や概念は、日本文化で捉え方が異なる可能性があるため (Suizzo, 2007), 他文化の質問紙を翻訳するのではなく、日本の親を対象とした新たな質問項目を作成することにした。

質問項目は、子育ての長期目標についての回答を得るための質問である「子どもにどのように育ててほしい／育てほしくないか」 (Harwood, 1992; Harwood et al., 1995) についての150名分の自由記述回答と、研究1のインタビュー調査から得られた回答を質問項目に加え、全167項目からなる初期プールを作成した。次にこれらの項目について、4歳未満の子どもを持つ母親765名から回答を得た。項目分析及び因子分析の結果、最終的に、「個人志向の能力向上 ($\alpha=.93$)」、「親との関係性 ($\alpha=.93$)」、「周囲からの承認 ($\alpha=.93$)」、「他者への感情 ($\alpha=.94$)」、「生活への真面目さ ($\alpha=.93$)」の5因子、全41問からなる質問紙が完成した。さらにこの質問紙を用いて、4歳未満の子どもを持つ母親674名から回答を取得し、確認的因子分析を行った。5因子モデルと1因子モデルを比較したところ、CFI, RMSEA, SRMR, AICのすべてで5因子モデルの方が当てはまりがよく、さらに基準値が設定されている指標であるCFI, RMSEA, SRMRについてはすべて基準を満たしていることを確認した。

得られた5因子は、質的調査を行った研究1とほぼ対応していたが、研究1において個人志向の目標として挙げられた「やりたいことをやりながら生きる人」と「自分の人生を主体的に生きる人」は、因子分析の結果、「個人志向の能力向上」の1因子にまとまること示された。これはSuizzo et al. (2019)の結果と一致するものであった。またKagitçibasi (1996; 2005)の文化の2軸モデルと本結果を比較すると、5因子のうち、Autonomyに対応する因子は「個人志向の能力向上」の1因子のみであり、その他4因子はすべてRelatednessに対応するものであった。このようなAutonomyに対してRelatednessに対応する因子が相対的に多い結果は、Suizzo (2019), Harwood et al. (1999), 研究1でも同様に見られる。これは、Autonomyを実現するために個人の性質として持ち合わせるべきと考えられるものは1因子である一方で、Relatednessを実現するために持ち合わせるべきと考えられる個人の性質はいくつかの種類に分類されると捉えることができる。Relatednessで示される他者との関係を実現するために、「他者を大切にできる」などといった内面的な優しさを持つという方向性、「ダラダラ生活しない」などまっとうな人であるという方向性、また「誰からも愛される」といった他者との関係性構築に関する方向性があり、親によって必要と感じるアプローチが異なることが示唆された。

研究3では、コミュニケーション場面における子育て行動選択に影響を与える要因の検討を行った。実際に親子のインタラクションの観察を行った研究により、子

育て目標が、子どもとの遊びの方法や (Harwood et al., 1999) , 子どもと話すトピック (Rowe & Casillas, 2011) に影響を与えることが知られている。親子のコミュニケーション場面を、子どもへの行動とそれに対する子どもからの反応、反応を受けさらなる行動の生起、という連続的な過程をみなしたとき、親はコミュニケーション場面の中で幾度となく行動決定をしている。このようなコミュニケーションにおいて、親はいかにして自身の行動を決定しているのかを明らかにするために、研究3では、連続的な双方向コミュニケーションの具体例として絵本の読み聞かせに着目し、読み聞かせ活動の中で生じる親の行動とその行動の決定要因について検討した。

1歳5ヶ月から1歳11ヶ月の子どもを持つこと、日常的に読み聞かせを行っていることを条件に募集を行い、7組の母子が、絵本の読み聞かせ課題とインタビューから構成された調査に参加した。インタビュー項目は、(1)絵本や読み聞かせに対する考え、(2)読み聞かせ場面で観察されたコミュニケーション方式の理由、であった。読み聞かせの観察データからは親の発話と行動の双方を含んだ働きかけの種類を抽出し、インタビューデータからはM-GTAを行い、働きかけの理由を抽出、整理した。

その結果、親は読み聞かせの中で見られる子どもの反応から、「子どもの成長・発達に関する価値」、「今ここの子どもに関する価値」、「今ここの自分に関する価値」を見出していること、またそれは親のポジティブな感情をもたらすこと、さらに、親はこれらを強化するように読み聞かせの中で子どもへの働きかけを変化させていることが示された。

以上の結果を踏まえ、子育て目標と行動選択の関係を整理すると、研究3で得られた絵本読み聞かせの価値は、子育ての短期目標 (研究1) と、絵本の読み聞かせの目的 (Harkins, 2014) に概ね対応づいていた。つまり、親が感じる読み聞かせの価値は、自分自身が持つ子育て目標や、絵本の読み聞かせの目的に対する信念によって異なることが示唆された。また親は、読み聞かせに関連する働きかけを行い、それに対し子どもが何らかの反応を返すと、親はその反応を見て評価を行ったり感情を引き起こされたりする。それがポジティブだった場合、その反応や価値を強めるように働きかけを行うと同時に、親は、親の働きかけと子どものポジティブな感情・価値との結びつきを学習し、次の機会に学習の結果を活かす。絵本の読み聞かせには親の多様なスタイルがあると指摘されているが (Reese et al., 2003) , 一人の母親に着目するとスタイルが一貫していることも知られている (Haden et al., 1996) . 上記のようなプロセスは、親の一貫した読み聞かせスタイルの確立、また読み聞かせのみならず、親の子育て行動のスタイル形成にも寄与している可能性が示唆された。

これらの研究によって、日本の親の持つ子育て目標と、それに影響を受ける子育て行動の調整の仕組みの一端を明らかにした。